

# On the Adominal Dative in Old Icelandic

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9721">http://hdl.handle.net/2297/9721</a>

## 古アイスランド語の連体修飾の与格について

入江 浩 司

### 1. はじめに\*

古アイスランド語<sup>1</sup>には、*hoggva í höfuð honum* ‘hew in head:ACC him:DAT’「彼の頭に斬りつける」、*setja oxina í höfuð honum* ‘set ax-the:ACC in head:ACC him:DAT’「彼の頭に斧を打ちつける」といった表現におけるように<sup>2</sup>、前置詞の目的語である名詞句の修飾成分として与格の名詞句が現れることがしばしばある<sup>3</sup>。典型的には、身体名称が前置詞句の目的語で、その持ち主が与格名詞句で表わされる。本稿の目的は、こうした「前置詞＋名詞句＋与格名詞句」という前置詞句の構成要素それぞれの特徴を、実例について詳細に検討することである。なお、いわゆる「所有の与格」がアイスランド語で現れるのは、本稿で問題にしているような前置詞句内の名詞を修飾する場合がほとんどであり、ドイツ語の *Er wäscht dem Kind die Hände* のような与格の用例はまず見られない。

本稿の以下の構成は次の通りである。まず第2節で、本稿で使用したデータの範囲について述べておく。第3節が本論で、上記の前置詞句の各構成要素の特徴について検討する。第4節では、前置詞の目的語として身体名称が現れてはいるが与格名詞句の修飾を受けていない例を検討する。第5節はまとめである。

### 2. データについて

本稿では、中世アイスランドで書かれた「アイスランド人のサガ」と総称される作品群のうち、質・量ともに特に充実した「エギル・スカッラグリームソンのサガ *Egils saga Skalla-Grímssonar* (1230年頃成立、略号Eg)」、「焼き討ちのニャールのサガ *Brennu-Njáls saga* (1280年頃成立、略号Nj)」、「グレットティル・アースムンダルソンのサガ *Grettis saga Ásmundarsonar* (1320年頃成立、略号Gr)」の3作品から用例を集めて検討した。なお、これらの作品はいずれも作者不詳であるが、「エギルのサガ」についてはスノッリ・ストゥルルソン *Snorri Sturluson* (1179-1241) を作者とする説がある。参照した刊本のテキスト本文の総ページ数は、Eg 297頁、Nj 459頁、Gr 287頁である。引用した例文の最後に、作品の略号と、使用した刊本のページ番号を記した。なお、できるだけ網羅的に用例収集を行なうために、CD-ROM化された電子テキストも合わせて利用した<sup>4</sup>。

サガのテキストでは、途中、頌歌や登場人物の心情を詠う韻文がしばしば挿入されるが、

これは極めて技巧的な詩で、用いられる語彙も特殊な場合が多いため、本稿ではテキストの散文の部分のみを考察の対象とした。また、与格名詞句が前置詞句から遊離した位置に現れていると考えられる場合もあるが<sup>5</sup>、本稿では前置詞句として緊密性が高いと考えられる、前置詞の目的語の直後に与格名詞句が現れる場合のみを集めて検討した。

### 3. 前置詞句の構成要素の現れ方

この節では、「前置詞+名詞句+与格名詞句」という前置詞句の構成要素の現れ方について、前置詞の目的語としての名詞句 (3.1)、与格名詞句 (3.2)、前置詞の種類と意味特徴 (3.3)、の順に検討する。

#### 3.1 前置詞の目的語

ここでは前置詞の目的語として現れる名詞句の性質について、名詞の種類 (3.1.1)、接尾辞定冠詞のつき方 (3.1.2)、名詞の修飾成分 (3.1.3)、を検討する。

##### 3.1.1 名詞の種類

前置詞句内で与格名詞句の修飾を受ける名詞を、本稿で検討の対象とした作品ごとに集計したのが本稿末尾の別表である。表に挙げたように、総計 43 の名詞について用例が収集できた。この位置には普通名詞のみが現れるようで、代名詞や固有名詞の例はなかった。用例数には大きく偏りがあり、20 以上の用例のある名詞は、*hond* 「手」(154 例)、*høfuð* 「頭」(56 例)、*bak* 「背中、背後」(39 例)、*fótr* 「足」(21 例) の 4 つであり、他の名詞より目立って用例数が多い。その中でも *hond* 「手」の用例がとりわけ多いが、これは具体的な身体部分としての「手」を表わす用例の他に、*ganga á hendr DAT* 'go on hands DAT' 「DAT に服従する」、*kaupa ACC til handa DAT* 'buy ACC to hands DAT' 「DAT のために (<の手に) ACC を買ってやる」*lýsa vígi á hendr sér* 'declare man-slaughter on hands oneself:DAT' 「殺人を自分の仕業であると宣言する」、*selja ACC í hendr DAT* 'hand over ACC in hands DAT' 「DAT (の手) に ACC を渡す、譲る」といった、抽象的な意味に拡張された用法が多いためである<sup>6</sup>。

表からわかるように、人や動物の身体部分を表わす名詞が圧倒的に多い。また、身体名称は身体の表面に見えるものばかりで、身体内部にある骨や内臓などの例は見つからなかった<sup>7</sup>。先行研究では、与格名詞句と緊密な関係にある身体名称や衣類であるとされている (Nygaard 1905: 99-100, Faarlund 2004: 170-171)。しかし実際には、衣類の例は極めて少ない<sup>8</sup>。一方で、身体部分や衣類以外の興味深い例も見つかった。ここでは身体名称以外の例としてどのようなものがあるか、収集できた例を個別に挙げておく。

まず、身体に密着した衣類の例としては、*belti* 「ベルト」が見つかった。

- (1) Flosi tók þá fésjóð af belti sér ok kvazk  
 Flosi:NOM took then purse:ACC off belt:DAT himself:DAT and said  
 vildu gefa honum.  
 would give him:DAT

「そうしてフロシ（男性名）は自分のベルトから財布を取り、彼に差し上げたいと言った。」(Nj 350)

また、身体に密着しているとは考えにくい持ち物の例もある。

- (2) Fá mér leppa tvá ór hári þínu, ok snúið þit  
 give me:DAT locks:ACC two from hair:DAT your and twine you.two:NOM  
 móðir mín saman til bogastrengs mér.  
 mother:NOM my together to bow.string:GEN me:DAT

「(敵に襲われて弓の弦を切られ、傍にいた妻に声をかける場面) お前の髪から二ふさをくれ。そして母さんと二人でより合わせて私の弓の弦にしてくれ。」(Nj 189)

やはり持ち主との密着度はやや低いと思われる skjöldr「盾」には、*koma í opna skjöldu DAT* ‘come into open shields DAT’ 「DATの側面から（<盾の開いているところへ向かって）攻撃する」のように、慣用句化している表現もある。

- (3) Skotar höfðu látit fara sumt liðið laust, ok kom þat í opna  
 Scots had let move some troop loose and came it into open  
 skjöldu jarlsmönnum, ok varð þar mannfal mikit [...]  
 shields:ACC earl's.followers:DAT and occurred there slaughter great

「スコットランド人たちは軍勢の一部を分離して進ませ、その部隊が侯の軍の側面を攻め、そこで多くの者が倒れ・・・」(Nj 207)

無生物の全体と部分の関係にあるものも、本稿で問題にしている表現をとることがある。例えば、身体名称 *kverk*「喉（あごの裏の部分）」が、斧の刃の下側の部分を表わすのに使用されている例がある。身体部分と物の形の類似に基づく転用の例である。

- (4) Gunnarr snerisk skjótt at honum ok lýstr við atgeirinum,  
 Gunnarr turned.himself quickly to him and strikes with halberd-the  
 ok kom undir kverk øxinni, [...]  
 and came under underside:ACC ax-the:DAT

「(相手に背後から斧で斬りつけられて) グンナルは素早く相手の方へ向き、鉾で打ち返すと斧の刃の下側（<あごの裏）に当たり・・・」(Nj 137)

*bak*「背中」という名詞は、実際の身体部分を表わす用例だけでなく、空間的また時間的な前後関係に拡張された例がある。

(5) a. Hann gekk á bak húsum [...]

he:NOM went on back:ACC houses:DAT

「彼は家の裏側にまわり・・・」(Gr 152)

b. [...] ætlar eigi heim fyrr en á bak jólnum;

intends not homewards sooner than on back:ACC yule-the:DAT

「(彼は)冬至祭の後でなければ帰ってこないだろう。」(Gr 64)

また、わずかではあるが、本来的に無生物の部分を表わす名詞が与格名詞句で修飾されている例もある。

(6) Skalla-Grímr sá í egg oxinni;

Skalla-Grimr:NOM saw in edge:ACC ax-the:DAT

「スカッラグリームルは斧の刃を見つめた。」(Eg 96)

(7) hann stakk sverðinu í bug hringinum ok dró  
he:NOM stuck sword-the:DAT in bight:ACC ring-the:DAT and drew  
at sér, [...]

to himself:DAT

「彼は剣を腕輪の内側に通して自分の方へ引き寄せ・・・」(Eg 144)

生物に関係する名詞で、líf「命」や hugr「考え」といった、「部分」とは認識されにくいと思われる抽象的なものの例も若干ある。

(8) Eða hvat villtu nú vinna til lífs þér, Grettir, ef  
and what will.you now work for life:GEN you:DAT Grettir:NOM if  
ek gef þér líf?

I:NOM give you:DAT life:ACC

「グレットイルよ、もし私がお前の命を助けてやるなら、お前は自分の命のために何をしようと思うか？」(Gr 169)

(9) [...], ok hefi ek þat helzt í hug mér at fara  
and have I:NOM it:ACC most.of.all in mind:DAT me:DAT to go  
ok finna Høskuld ok beiða hann sonarbóta, [...]

and find Høskuldr:ACC and ask him:ACC son's.compensation:GEN

「・・・何はさておき私はホスクルドゥルに会いに行き、息子の賠償を彼に求める考えだ (<私の考えの中にもっている)・・・」(Nj 38)

また、身体部分や衣類ではなく、動く物が産出するものとも言える spor「足跡」には、ganga í spor DAT 'go in footsteps DAT' 「DATの後をついて行く、従う」という慣用句的表現がある。

- (10) [...] *enda er þat ærit eitt til, at ek vil eigi ganga*  
besides is it sufficient one for that I:NOM will not go  
*í spor þrælum þínum;*  
in footsteps:ACC slaves:DAT your

「・・・それに、俺はお前の奴隷たちについて（<お前の奴隷たちの足跡を）行きたくない、ということだけで十分だ。」(Nj 48)

### 3.1.2 接尾辞定冠詞

前置詞句内で与格名詞句の修飾を受ける名詞は、ほとんどの場合、接尾辞定冠詞を伴わない形で現れる。一方、接尾辞定冠詞がついた形が確認できたのは、5例のみである。理由については不明であるが、その5例のうち3例が *háls* 「首」であるのが目立つ。次に具体例を挙げておく（問題の箇所のみ取り出し、ここでは名詞本体と接尾辞定冠詞の形態素境界をハイフンで示す）。

- (11) a. *hjó á háls-inn haugbúa-num*  
hewed on neck-the:ACC cairn.dweller-the:DAT  
「塚の住人（幽霊）の首に斬りつけた」(Gr 58, 類例Nj 443)
- b. *kom á háls-inn Þorkatli*  
came on neck-the:ACC Þorkell:DAT  
「(剣が) ソルケルの首に当たった」(Nj 158)
- c. *kom saxit í hofuð-it honum*  
came sword:NOM in head-the:ACC him:DAT  
「短剣が彼の頭に当たった」(Gr 155)
- d. *þreif til handar-innar Eyjólfí*  
grasped to hand-the:GEN Eyjólf:DAT  
「エイヨールヴルの手をつかんだ」(Nj 368)

### 3.1.3 名詞の修飾成分

ここでは与格名詞句によって修飾される名詞につく、他の修飾成分について述べておく。調査の結果、現れる可能性のある修飾成分としては、*hægri* 「右」、*vinstri* 「左」、*annarr* 「他方の」、*hvárr* 「それぞれの」といった、特定の範囲での限定を表わす形容詞や、数量詞 *báðir* 「両方」にはほぼ限られるようである。

- (12) a. *festi hann við hægri hǫnd sér*  
fastened he:NOM against right hand:ACC himself:DAT  
「(剣を) 彼は自分の右手に固定した」(Eg 209)

- b. hann vafði mottli um *vinstri* hǫnd sér  
 he:NOM wrapped mantle:DAT around left hand:ACC himself:DAT  
 「彼はマントを自分の左手に巻きつけた」(Nj 50)
- c. garðr gekk á *aðra* hǫnd þeim  
 fence:NOM went on other hand:ACC them:DAT  
 「垣根は彼らのもう一方の側 (手) にもあった」(Eg 115)
- d. spennti Egill gullhring á *hvára* hǫnd honum  
 clasped Egill:NOM gold.ring:ACC on each hand:ACC him:DAT  
 「エギルは彼(戦死した兄)の両(それぞれ)の手に黄金の腕輪をはめた」(Eg 142)
- e. Þórólfr sá til *beggja* handa sér  
 Þórólfr:NOM saw to both hands:GEN himself:DAT  
 「ソーロールヴルは自分の両側 (手) に目をやった」(Eg 40)

やや特殊なものとして、*koma í opna skjöldu DAT* ‘come into open shields DAT’ 「DAT の側面から (<盾の開いているところへ向かって) 攻撃する」という、特定の形容詞との結びつきで慣用句化した表現がある (例文 (3) を参照)。

### 3.2 与格名詞句

ここでは与格名詞句について、名詞の種類 (3.2.1)、修飾成分 (3.2.2)、有生性 (3.2.3) について順次検討する。

#### 3.2.1 名詞の種類

与格名詞句の語類としては、代名詞と固有名詞 (個人名) が圧倒的に多い (これまでの例文を参照)。人や動物を表わす普通名詞も現れている (例文 (3), (11a) を参照)。また、普通名詞が現れる場合、ほとんどが接尾辞定冠詞か同格の代名詞を伴っており、形態的にも意味的にも、この位置に現れる名詞類は原則として「定」であると言える。

#### 3.2.2 修飾成分

与格名詞句を修飾する成分があるのはまれである。形容詞がついたものは見つからなかったが、属格の名詞で修飾されている例はあった。

- (13) Jarlinn segir, at hann hefði af hǫndum greitt allan  
 jarl-the:NOM says that he:NOM had off hands:DAT paid all  
 skatt ok fengit í hendr sendimönnum *konungs*;  
 tribute:ACC and given in hands:ACC messengers:DAT king:GEN  
 「候は、貢物はすべて支払い済みで、王の使者たち (の手) に渡してある、と言う」  
 (Eg 232)

修飾成分ではないが、同格で長い人名などが現れて与格名詞句自体が長くなることはよくある。

- (14) Hér set ek upp níðstøng, ok sný ek þessu níði á  
 here set I:NOM up pole.of.insult:ACC and turn I this insult:DAT on  
 hǫnd *Eiríki konungi ok Gunnhildi dróttningu*, [...] *hand:ACC Eiríkr:DAT king:DAT and Gunnhildir:DAT queen:DAT*  
 「ここに私は侮辱の柱を立て、この侮辱をエイリークル王と王妃グンヒルドゥル (の手) に向ける・・・」 (Eg 171)

### 3.2.3 有生性

与格名詞句として現れるのは、一般に有生性が最も高いとされる人間を指示する名詞類が圧倒的に多いが、有生性の高さは絶対的な制約ではない。次は動物を表わす普通名詞の例である。

- (15) Qnundr ór Tröllaskógi hjó með øxi í hǫfuð  
 Qnundr:NOM from Tröllaskógr:DAT hewed with ax:DAT in head:ACC  
*hundinum*, [...] *dog-the:DAT*  
 「トロッラスコーグル (地名) のオヌンドゥルは斧で犬の頭に斬りつけ・・・」 (Nj 186)

すでに死んでいる人間でも、与格名詞句として表わされる (例文 (12d) も参照)。

- (16) Hjó hann þá á háls *Gretti* tvau hogg eða þrjú,  
 hewed he:NOM then on neck:ACC Grettir:DAT two blows or three  
*áðr af tæki hǫfuðit*.  
 until off took head-the:ACC  
 「そうして彼は (すでに死んでいる) グレットティルの首に、頭を切り離すまで、二度三度と斬りつけた。」 (Gr 262)

また、3.1.1 で言及したように、物の全体と部分の例では、当然、与格名詞句は無生物である (例文 (4), (6), (7) を参照)。

## 3.3 前置詞の種類と意味特徴

ここでは用例に現れた前置詞の種類 (3.3.1) と、前置詞句の意味特徴 (3.3.2) について検討する。

### 3.3.1 前置詞の種類

問題となる前置詞句は、動詞の目的語の指示物や動作そのものが向かう方向を表わす場合が特に多く、動作の起点を表わす例も多い。しかし、静的な場所を表わすと解釈できる



ものは少ない。このことと対応して、向かう方向を表わす前置詞や、起点を表わす前置詞については、一般に使用されるものがほぼすべて現れている。表 1 は、用例が確認できた前置詞の一覧である。前置詞と結びつく名詞の格も合わせて示した。fyrir framan ACC「～の前を」のように、二語から成る前置詞もある。

表 1 用例に現れた前置詞の一覧

af DAT 「～から離れて」	í ACC 「～の中に」
at DAT 「～の方へ」	í gegnum ACC 「～を通過して」
á ACC 「～の上に」	í milli GEN 「～の間に」
á DAT 「～の上で」	ór DAT 「～(の中)から」
á milli GEN 「～の間に」	til GEN 「～へ向かって」
frá DAT 「～(の表面)から」	um ACC 「～のまわりを」
fyrir ACC 「～の前に」	undan DAT 「～の下から」
fyrir DAT 「～の前で、～の前へ」	undir DAT 「～の下に」
fyrir framan ACC 「～の前を」	við ACC 「～のところで」
fyrir neðan ACC 「～の下を」	yfir ACC 「～の上に」
fyrir ofan ACC 「～の上を」	

一般によく使用される前置詞のうち、eptir DAT「～のあとを、～に沿って」、hjá DAT「～のところで」、með DAT「～と共に」などの例は見つからなかった。

### 3.3.2 前置詞句の意味特徴

ここでは、問題となる前置詞句が表わす意味に注目し、動作の向かう方向を表わすもの(3.3.2.1)、動作の起点を表わすもの(3.3.2.2)、静的な場所を表わすもの(3.3.2.3)、の3つに分けて例を挙げておく。

#### 3.3.2.1 動作の向かう方向を表わすもの

問題となる前置詞句の非常に多くは、動詞が表わす動作あるいは動作の目的語が向かっていく方向を表わす(例文(3),(4),(5),(6),(7),(10),(13),(14),(15),(16)も参照)。

- (17) Grettir setti þá sǫmu øxi í hofuð honum, svá at  
 Grettir:NOM set then same ax:ACC in head:ACC him:DAT so that  
 þegar stóð í heila;  
 at.once stood in brain:DAT

「それからグレッティルはその同じ斧を彼の頭に打ちつけると、(斧は)たちまち脳天に突き立った。」(Gr 46)

### 3.3.2.2 動作の起点を表わすもの

前置詞句が動作の起点を表わすものも多い（例文 (1) も参照）。

- (18) Þeir Ásgrímr litu til hans, ok var andlit hans at sjá sem á blóð  
they Ásgrímr looked at him and was face his to see as.if on blood  
sæi, en stórt hagl hraut ór augum honum ;  
saw and big hail:NOM fell from eyes:DAT him:DAT

「アースグリームルたちが彼の方を見ると、彼の顔はまるで血の中に見るようで（真っ赤で）、彼の両目から大きな雹（のような涙）がこぼれた。」(Nj 378)

### 3.3.2.3 静的な場所を表わすもの

数は比較的少ないが、静的な事物のある場所と解釈できる前置詞句もあり、「持つ」という意味の動詞とともに現れることが多い（例文 (9) も参照）。

- (19) Qngull kvazk eigi kunna at eiga þenna mann yfir höfði  
fish.hook said not be.able to possess this man:ACC over head:DAT  
sér, er engum tryggðum vildi lofa eða heita þeim.  
himself:DAT that no faiths:DAT would promise or pledge them:DAT

「釣り針（綽名）は、自分たちに対して何の誓いも約束する気がないような者を相手にしている（<自分の頭の上に持っている）わけにはいかないと言った。」(Gr 263)

## 4. 与格が使用されていない例

この節では、これまでの例とは異なり、前置詞の目的語として身体名称などの「部分」が現れているが、その持ち主が、直後に置かれる与格名詞句で表わされているのではない例について触れておく。持ち主の表示のある例として、所有形容詞・属格による表現 (4.1)、前置詞句による表現 (4.2)、そして、修飾成分として持ち主が現れていない例 (4.3)、の順に取り上げる。

### 4.1 所有形容詞・属格による表現

所有形容詞（「所有代名詞」とも呼ばれる）や属格による表現は、一般に持ち主を表わすのに最も広く使用される手段であるが、前置詞の目的語となる身体名称を修飾する成分として出現するのは稀である。なお、所有形容詞と属格は相補的に分布しており、所有形容詞は1・2人称および3人称再帰形のみが存在し、3人称代名詞を含むその他の名詞類の所有を表わす形式としては属格が使用される。(20) は所有形容詞（3人称再帰）の例（例文 (2) の *ór hári þínu* 「お前の髪から」も参照）、(21) は属格の例である。

- (20) Grettir spyrndi við fæti sínum ok [...]  
Grettir:NOM kicked with foot:DAT his and

「グレットティルは（薪を）自分の足で蹴り・・・」(Gr 250)

- (21) [...] snerisk hon flöt ok stókk af trénu ok á fót  
turned it:NOM flat and leaped off tree-the:DAT and on foot:ACC

*Grettis inn hægra fyrir ofan kné, [...]*

Grettir:GEN the right:ACC above knee:ACC

「それ（打ちつけた斧）は、平らになって木から跳ね、グレットティルの右足の膝の上に飛び・・・」(Gr 251)

#### 4.2 前置詞句による表現

前置詞の目的語である身体名称に、さらに持ち主を表わす前置詞句が付加されて表現される場合がある。

- (22) Hann spratt upp ór rúminu ok greip spjótit  
he:NOM sprang up from bed-the:DAT and grasped spear-the  
Skarpheðinsnaut tveim höndum ok rak í gegnum fótinn  
Skarpheðinsnautr:ACC two hands:DAT and drove in through foot-the:ACC  
*á sér.*  
on himself:DAT

「彼はベッドから飛び起き、槍スカルプヘジンスナウトゥル（槍の名）を両手でつかむと（それを）自分の（表面の）足に突き刺した。」(Nj 402)<sup>9</sup>

#### 4.3 修飾成分として持ち主が現れていない例

動詞と結びつく主要な項として持ち主が同一文中に現れ、身体部分の修飾成分としては持ち主の表示がない例がある。例文 (23) は能動文で、(24) は受動文である。

- (23) Þá reddisk Þorvaldr ok laust hana í andlitit, [...]  
then got.angry Þorvaldr:NOM and struck her:ACC in face-the:ACC

「するとソルヴァルドゥルは怒って彼女の顔を殴り、・・・」(Nj 33)

- (24) [...] hann var skotinn í handlegg, [...]  
he:NOM was shot in arm:ACC

「・・・彼は腕を射られ、・・・」(Nj 404)

上のように、動詞の目的語の位置に持ち主が現れ（対応する受動文では主語の位置）、前置詞句でその部分を規定するような表現は、打撃ないし接触の意味の動詞に限られると予測される（現代アイスランド語のこうした表現については入江 1998 を参照）。

前置詞の目的語として持ち主が現れ、さらに身体部分が前置詞句で付加されている例もあるが、現代アイスランド語では不可能な表現である（入江 1998: 268）。

- (25) Egill hjó til hans á oxlina, ok beit ekki  
 Egill:NOM hewed to him:GEN on shoulder-the:ACC and bit not  
 sverðit ;  
 sword:NOM

「エギルは彼の肩に斬りつけたが、剣は食い込まなかった。」(Eg 209)

人物を主語とし、その身体的特徴を描写する文において、身体のどの部分において、ということ特定する場合には、身体名称には通常、修飾成分がつかない。

- (26) en er hann var hálfþrítøgr at aldri, þá hafði hann  
 but when he:NOM was half.thirty at age then had he:NOM  
 hærur í hqfði ;  
 grey.hair:ACC in head:DAT

「しかし彼は 25 歳の頃、頭に白髪があった。」(Gr 26)

主語自身が通常身につける衣類などを表わす場合も、身体部分を修飾する成分は現れないことが多いが、再帰代名詞の与格で持ち主の表示がされることもある。例文 (27) は修飾成分が何もついていない例で、(28) は 3 人称再帰代名詞を伴っている例である。後者の例のように、動きのある場合、持ち主の与格が現れやすいのかもしれない。

- (27) Berserkrinn sat á hesti ok hafði hjálm á hqfði  
 berserk-the:NOM sat on horse:DAT and had helm:ACC on head:DAT  
 ok ekki spennt kinnbjörgunum ;  
 and not clasped cheek.guards:DAT

「狂暴戦士は馬にまたがっており、兜を頭にかぶっていたが、頬あては留めていなかった。」(Gr 135)

- (28) hann tók skjöld sinn ok gyrði sik sverðinu  
 he took shield:ACC his and girded himself:ACC sword-the:DAT  
 Qlvisnaut, setr hjálm á hqfuð sér, [...]  
 Qlvisnautr:DAT sets helm:ACC on head:ACC himself:DAT

「彼は自分の盾を取り、剣オルヴィスナウトゥルを帯び、兜を自分の頭にかぶり、・・・」(Nj 136)

## 5. おわりに

以上、古アイスランド語の連体修飾の与格が現われる前置詞句について検討した。本稿の中心である第 3 節の要点をまとめておく。前置詞の目的語としては、主に身体名称や物の部分を表わす普通名詞が現れ (3.1.1)、接尾辞定冠詞がつくのは稀であり (3.1.2)、修飾

成分が現われる場合は「右」「左」などの限定の表現に限られる (3.1.3)。与格名詞句については、代名詞や固有名詞 (人名) が多く、形態的・意味的に「定」であり (3.2.1)、修飾成分としては属格名詞の例しかなく (3.2.2)、意味的に有生性の高いものが多いが、そうでない例もある (3.2.3)。前置詞については、動作の向かう方向や起点を表わすものが多い (3.3)。第 4 節では、本稿で検討した与格と競合するような表現を挙げたが、これらの出現条件の詳細を明らかにすることは、今後の課題としたい。

## 注

\* 本稿は、金沢大学平成 18 年度学長戦略経費 (若手の萌芽的研究)、および日本学術振興会平成 19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)、課題番号 19520335、研究課題「古アイスランド語における所有表現の研究」) による研究成果の一部である。

1 ゲルマン系の言語。名詞類には形態論的な格として、主格・対格・与格・属格の区別がある。名詞には接尾辞定冠詞がついた形があり、この形を本稿では英語のグロスで ‘-the’ と表示する。不定冠詞はない。単純時制は現在と過去。

2 本稿で使用する略号は次の通り : NOM = nominative 主格, ACC = accusative 対格, DAT = dative 与格, GEN = genitive 属格。

3 現代アイスランド語でも前置詞句内の名詞句を修飾する与格が現れるが、(i) この与格が使用されるのはフォーマルな文体に限られ、(ii) 与格の修飾を受けるのは、その与格名詞句と譲渡不可能所有の関係にある身体名称にほぼ限定され、(iii) この種の表現には *hafa allt á hornum sér* ‘have all on horns oneself:DAT’ 「(すべてを自分の角にかける) すべてに批判的である、不満である」のような慣用句になっているものがある、といったことが先行研究で指摘されている (Einarsson 1945: 111, Þráinsson 2005: 217-219)。

4 *Íslendinga sögur: Orðstöðulykill og texti*. Reykjavík: Mál og menning, 1996. ただし、この電子テキストは、本稿で引用したテキストとは異なる刊本を底本としており、綴りも現代語風にされている。

5 例えば、次のような例。

Þar fylgði mikill verkr, svá at hann mátti hvergi kyrr þola,  
 there accompanied great pain so that he:NOM could not-at-all still endure  
 ok eigi kom honum svefn á auga.  
 and not came him:DAT sleep:NOM on eye:ACC

「それに大変な痛みが伴い、彼はじっと耐えることができず、一睡もできなかった (<彼には目に眠りが来なかった)。>」(Gr 252)

- 6 ちなみに現代アイスランド語では、属格支配の前置詞 *til* と結びついた「手」の複数属格形に由来すると思われる *handa* が、これだけで（前置詞を伴わず）「~のための」という与格支配の前置詞になっている。
- 7 *kinnbein* 「ほお骨」の用例があったが、この用例では顔の表面のほお骨の張っている部分をさす：*setti halann á kinnbein Þorbirni* ‘put peg on cheek.bone:ACC Þorbjörn:DAT」  
「(チェスの駒の) 石突でソルビョルンのほお骨を突いた」(Gr 227)。
- 8 衣類の例としては、Nygaard (1905: 99) も Faarlund (2004: 171) も、*taka þorn einn ór serk sér* ‘take thorn:ACC one from skirt:DAT oneself:DAT」  
「自分の肌着から一本の棘を取る」という、ヘイムスクリングラ *Heimskringla* からの同じ例を一つだけ挙げている。
- 9 *sér* は 3 人称再帰代名詞の与格。現代アイスランド語では、*höndin á mér* ‘hand-the on me」  
「私の手」のように、身体部分の持ち主を前置詞句で表示する表現が非常に多くなっている。

#### 引用作品

- [Gr] *Grettis saga Ásmundarsonar*. In: Jónsson, Guðni (ed.) (1936) *Íslenzk fornrit VII*. Reykjavík: Hið íslenska fornritafélag.
- [Eg] Nordal, Sigurður (ed.) (1933) *Egils saga Skalla-Grímssonar*. Íslenzk fornrit II. Reykjavík: Hið íslenska fornritafélag.
- [Nj] Sveinsson, Einar Ól. (ed.) (1954) *Brennu-Njáls saga*. Íslenzk fornrit XII. Reykjavík: Hið íslenska fornritafélag.

#### 参考文献

- Einarsson, Stefán (1945) *Icelandic: grammar, texts, glossary*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press [9th printing, 1986].
- Faarlund, Jan Terje (2004) *The Syntax of Old Norse: With a Survey of the Inflectional Morphology and a Complete Bibliography*. Oxford: Oxford University Press.
- 入江浩司 (1998) 「現代アイスランド語の “John kissed Mary on the cheek” タイプの構文」  
『東京大学言語学論集』17: 263-293.
- Nygaard, M. (1905) *Norrøn syntax*. Kristiania: Aschehoug.
- Práinsson, Höskuldur (ed.) (2005) *Setningar*. Íslensk tunga III. Reykjavík: Almenna bókafélagið.

別表 前置詞句内で与格名詞句の修飾を受ける名詞の一覧

名詞	意味	用例数			
		Eg	Nj	Gr	合計
hönd	手	34	93	27	154
höfuð	頭	4	29	23	56
bak	背中、背後	9	10	20	39
fótr	足	10	6	5	21
herðar	肩	3	1	7	11
auga	目	1	7	1	9
háls	首	1	5	3	9
fang	ふところ	1	1	5	7
kné	膝	4	1	2	7
brjóst	胸	2	2	2	6
munnr	口		4	2	6
oxl	肩、肩先	2	2	2	6
belti	ベルト		5		5
andlit	顔	1		2	3
eyra	耳	1	2		3
kverk	喉（あごの裏）		2	1	3
lær	腿		2	1	3
líf	命			3	3
hugr	考え、心		2		2
síða	脇腹、側面		1	1	2
skegg	髭	1	1		2
skjöldr	盾	1	1		2
þjó	尻、太腿			2	2
armleggr	上腕			1	1
bogastrængur	弓の弦		1		1
bringa	胸郭		1		1
bugr	湾曲部、内側	1			1
egg	刃、かど	1			1
enni	ひたい			1	1
fingr	指		1		1
hæll	かかと		1		1
handarkriki	ひじの内側	1			1
handarstúfr	腕の断端（切断部）		1		1
handleggr	腕			1	1
höfðahlutr	頭側の部分（上半身）	1			1
il	足の裏			1	1
kinn	頬		1		1
kinnbein	ほお骨			1	1
lend	（馬の）尻、腰		1		1
lófi	手のひら	1			1
spor	足跡、軌跡		1		1
tönn	歯		1		1
úlfiðr	手首		1		1
総計		80	187	114	381

配列は用例数の多い順。用例数が同じ場合はアルファベット順。